

園番号 715

## 令和7年度 平城こども園 研究実践概要

園長名 小川原 由美子  
全園児数 104名

### 1. 研究主題

自分らしさを発揮し、生き生きと活動する子どもを目指して  
～豊かな心と体を育み、なかまと共に育ち合いの場へ～

### 2. 研究年度

3年度

### 3. 研究主題設定理由

昨年度までの研究では、子どもが「やってみよう」と思えるような環境構成を工夫することで、心が揺さぶられ、意欲的に遊ぶ姿につながるということがわかった。また、体を動かして遊ぶことに焦点をあてていたが、意欲的に「やってみたい」と思う要因には人とのつながりも大きく関わっていることに気づいた。そこで、今年は、一人一人の心と体の相互関係にも目を向けながら、仲間と共に育ち合う姿を探っていきたいと考え、主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

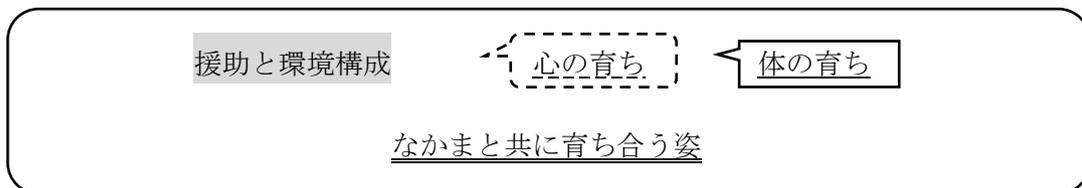
ひと・もの・こととの関わりの中で、いきいきと活動する子どもの心や体の育ちを見取り、なかまと共に育ち合う姿を探る。

#### ②研究の重点

- 子どもの興味・関心に沿いながら、体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるような環境構成や援助を工夫する。
- 日々の保育実践を通して、人とのつながり、心の育ち、体の育ちが相互に作用している姿を探る。

#### ③活動の方法

各学年の遊びや活動の中で生き生きと活動する子どもの姿を実践事例に挙げ、心や体の育ちに着目し、なかまと共に育ち合う姿につながっているのか分析した。



#### 【事例1】3歳児10月「やってみたいな」

子どもの興味のありそうな曲を流しておき、なりきれるような衣装やポンポンを手に取りやすいところに置いておくと、A児が嬉しそうに衣装を着て踊り始めた。

衣装を見つけたことで、興味をもち、踊りたい気持ちもちが芽生えた。

何度か踊ると、A児「プリキュアやねん。先生、お客さんになって」と、椅子をいくつか並べ、保育者を案内した。保育者が手拍子をして一緒に楽しんでいると、その様子を見たB児が衣装を着て「Bちゃんもする!」と、一緒に踊り始めた。保育者に見てもらえるのも嬉しくて、2人はリズムに乗って全身を大きく動かしながら踊り、顔を見合わせたりハイタッチをしたりして踊っていた。

C児は、保育者や友達が楽しそうにしている姿を見て、自らすすんでお客さん席に座り、体をゆらしたり、手拍子をしたりし始めた。



友達の楽しそうな姿を見て、自分もやってみようという意欲がでてきた。

保育者に見てもらえている安心感や嬉しさを感じた。

全身をのびのびと動かしたり、友達と動きをそろえたりして踊る。

保育者や友達が楽しそうにしている雰囲気を見て、自ら進んで参加した。

#### 【考察】

保育者が子どもの興味に合わせて環境を用意しておいたことで、自ら踊りたいという気持ちになった。保育者と子どもの信頼関係から「先生に見てもらいたい」という気持ち生まれ、安心して自分の思いを出し、踊ることを楽しめたのではないかと考える。また、楽しそうにしている友達の姿に刺激を受けて、自分もやってみようと思い、遊びに加わる姿は、自分中心だった世界から視野が広がり、他者への関心（人に興味をもつ心）が育ってきていると考えられる。一緒に遊ぶ中で、友達と「同じことがしたい」「一緒に嬉しい」という楽しさを共有することができたことは仲間意識の芽生えであると言える。楽しいと感じて踊ることで、より全身を使い、リズムに乗り、更に気持ちも高まっていったと思われる。

#### 【事例2】4歳児7月「やってみる」

5歳児がサーキット遊びをしているところに4歳児のA児も興味をもち一緒に楽しんでいました。5歳児のB児が2段の跳び箱を両足ジャンプで跳び越えている姿を見て、A児もやってみようと思いますが、「ちょっと怖い」と跳び越えるには踏ん切りがつかない様子でした。保育者が「お姉ちゃんすごいよね。どんな風に跳んでいるのかな」と声をかけていると、それに気付いた5歳児「これ使う?」と踏切板を置き、「こうすんねんで」と手本を見せてくれました。踏切板の分だけ跳び超える高さが低くなり、「やってみる」と挑戦、「できた!」と、とても嬉しそうに喜んでいました。

5歳児にあこがれ、やってみようと刺激を受けている。

跳び箱を跳び越える時に、体のどこにどのような力を入れると良いかがわかる。

跳び箱が低くなったことで、恐怖心が和らぎ、挑戦につながった。

「次は、踏切板なしでやってみる。」と踏切板をとって、もう一度挑戦すると見事大成功！「やった。できた！」と、そばで見ていた保育者にハイタッチしたり、周りで見えていた友達や教えてくれたB児からも拍手をもらったりしました。その様子に誘われて、他の4歳児もサーキット遊びに集まり始め、今度はA児自身が「こうやってするねんで。」と得意気な様子で手本となって教えていました。

繰り返し挑戦することで、踏ん張ったり、跳び越えたりする時の体の使い方がわかる。

友達や5歳児に応援してもらったり、認めてもらったりして喜びを感じている。



### 【考察】

友達との関わりが広がってきている4歳児は、5歳児の姿にもあこがれ、刺激を受けながら遊んでいる。お姉ちゃんのようにしたい、挑戦したいという気持ちを保育者がくみ取り、声をかけたことで、5歳児が気付き、教える姿につながった。異年齢の関わりの中で思いやりが育っていると考える。目標が少し低くなったことで、恐怖心が和らぎ「とんでみよう」という意欲をもつことができたと思われる。「もっとやりたい」と繰り返し挑戦する中で体の使い方や力の入れ方を獲得していくことができ、できるようになった喜びが自信につながったと考える。

挑戦しようとしている子どもの心と体の成長と共に、友達を応援したり、成功を一緒に喜んだりする周囲の友達にも、相手の立場に立つ力や仲間と成果を共有する喜びが育っていると推察される。

### 【事例3】5歳児4月「もう1回やってみよう」

E児は木登り名人で、この日も木登りを楽しんでいました。ところが、降りる時にいつも掴んでいるスラックラインのハンドルがありませんでした。E児は辺りを見渡して、近くにいたF児に「Fくん、持つやつ（ハンドル）取ってー！」と頼むと、その声に気付いたF児はすぐにハンドルを渡してくれました。また椅子が置いていないことにも気付き、「椅子もいるやん！」と言って、近くにあったベンチを持ってきて降りる手助けをしてくれました。ハンドルをつかんで、ベンチの上で降りてくることができ、「助かったわ～ありがとう」とお礼を言うとまた木を登り始めました。簡単そうに木登りするE児を見て「僕もやってみようかな」とロープを持って登ろうとするF児でしたが、なかなかうまくいきません。「木登りめっちゃ難しいやん」とF児は諦めそうになっていましたが、E児が「見といてな！ロープちゃんと持ってこうやってやんねんで」と見本を

体を使って遊ぶことが得意。  
木登りに挑戦する。

困っている友達に対して、自分で考え、思いやりの気持ちをもって、行動に移している。



友達の姿に刺激を受け、関心を広げている。

諦めそうになる友達に対して、手本を見せたり、応援したりしている。

見せてくれました。「めっちゃすごいな！もう一回やってみよう！」とE児のアドバイスを聞いて、もう一度チャレンジする気持ちをもつことができ、今まで木登りに興味のなかったF児のチャレンジがスタートしました。

友達からの励ましを受け、諦めずに挑戦している。



### 【考察】

友達のためにF児が優しい気持ちをもち、何がなかを自ら考えて用意する思いやりが育ってきていると考えられる。E児に刺激を受け、それまで興味がなかったが、「やってみよう」と挑戦する気持ちをもつ姿がみられた。友達が諦めようとした様子に気付き、見本を見せたり、アドバイスをしたりする姿は、E児にも相手を思いやる気持ちが育っていることが推察される。友達の応援、思いやりが諦めずにもう一度奮起してチャレンジする姿につながったと思われる。

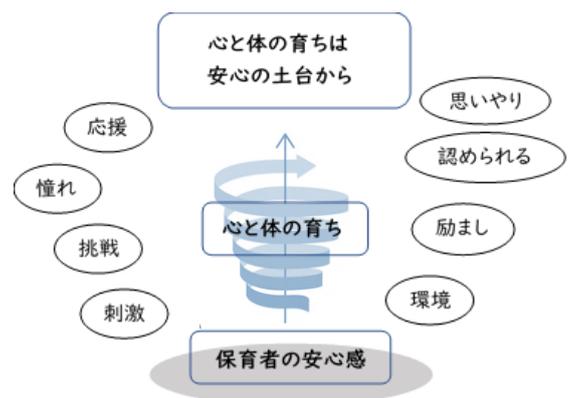
また、木登りをチャレンジする経験は、手でロープをしっかりと持ち、足で踏ん張りながら登る、腕の力を使って引っ張りながらあがる、などの体が育ってきているからこそ、できそうとやってみる気持ちにもつながっていると考えられる。

## 5. 研究の成果

子ども達は主体的に遊ぶ中で体を動かして遊ぶ楽しさを感じており、その中で子ども達が「やってみよう」と思う要因には人とのつながりが大きく関わっていることがわかった。

3歳児は信頼できる保育者に見守られているという安心感を土台に、「やってみよう」という意欲を育むことがわかった。4歳児は、友達や異年齢児の存在が刺激となり、「自分もできるようになりたい」という思いに加え、周囲からの励ましや応援を受け、少し難しいことにも挑戦しようとする意欲が高まった。5歳児では、やり遂げた達成感が喜びや自信へとつながる経験を重ねたことで、目標に向かって諦めずに挑戦する力が育まれた。また、自分のためだけでなく、友達が目標を達成するための方法を考え、支え合おうとする姿もみられるようになった。

子ども達の心身の育ちを連鎖として捉えると、まず保育者との信頼関係や安心感が土台にある。その土台の上に、物的・人的環境、周囲からの刺激、憧れや挑戦する気持ち、そして周囲からの応援・励まし・承認、思いやりといった多様な要因が相互に作用し、心と体は共に成長していく。こうした育ちは、段階的でありながら連続的に高まり合う「スパイラル」のような構造として捉えることができた。



## 6. 今後の課題

子どもが生き生きと活動する要因には人とのつながりが大きく関わっていることが明らかになった一方で、その育ちを支えるためには、職員間で子どもの姿を丁寧に共有し、援助の方向性を共通理解していくことが重要である。学年間での育ちの連続性を意識しながら日々の実践を振り返り、情報共有を充実させていきたい。